

応召体験記

林 政弘

昭和12年7月末、第1回の召集があり、第七師団で二個大隊、進徳でも3人の先輩が征かれた。今度は自分の番だと待っていたところ、届いたのは平常の勤務演習召集令状だった。

8月20日、懐かしい元隊に入隊。

8月23日、妻や母が子供を連れて面会に来て、8月28日、札幌東本願寺別院召集の赤紙を届けてくれた。待っていたことなので特別な想いもなかった。

中隊長に申告すると、良かった、頑張ってくれと言われたが、同じ演習召集者の中に誰も令状を受けた者がいないので不思議に思っていると、8月25日、連隊長より指名召集があり、指定の練兵場の命下布達式の時の壇のところに集まったのは4名だけだった。やがて連隊長が御出でになり壇上に立たれた。

「今度召集された後備歩兵第五大隊は、部隊長以下全員後備兵ばかりで、今の戦術法に疎いので、各中隊1名宛教官待遇で入れるので、上官の諮問に答え、万遺漏なきを期せよ」との訓示を受けた。ことの重大さに身の引き締まる想いで隊に戻った。

丁度、同年兵の中隊の準尉が今度の召集事務所長を命ぜられていて「これから事務所の設営に出かけるから一緒に行こう」と誘ってくれた。私物をまとめ、編入替えの手続きを済ませ、同行し設営を手伝った。一番近いところに宿舎を決めて貰い、部隊で一番先に入隊し、落ち着くことができた。

9月1日、召集完結。中隊毎に広場に集合。隊の編成を行い、それぞれ小隊、分隊が決められた。そして長が決められ、長には部下が割り当てられた。自分は、第一中隊第一小隊第五分隊長として12名の兵を預かり死を共にすることになった。宿舎がバラバラなので、毎日の演習の休憩時間を利用し、聞き取り調査をした。9年兵2名、10年兵5名、11年兵2名、12年兵3名、留守家族は皆健康なので、何より幸せだった。留守家族の合計は、74名でこれも一番で、この方々の喜びも悲しみも私一人に託されていることを思うと責任の重大さを感じた。

9月9日、札幌駅は、出征のため最後のお別れをする家族の方で前日からいっぱいだった。沿道も、駅のまわりも、日の丸で埋め尽くされ、送られる身の感激は本人でなければ判らない。ひとこと言えば、命は自分のものでなく、銃後の皆のものになってしまう不思議な心境である。心境の変化後は、演習に行くような気楽な道中であった。

大阪に着いて出発まで民宿で指示待ちの間、歓待で時間を過ごしていた。9月15日出発のため港に集結、夜まで待つようやく乗船、祖国を離れた。

* * * * *

行き先は全然知らされず、航行中、対空監視の命を受け、上甲板で監視中、濟州島が右に見える位置を航行中なので、上海方面であることが漸く判った。そのうち黄海に入り、黄色い泥海に行くこと4時間、漸く揚子江の河口に着き、翌朝まで停泊。夜中爆撃を受けたが被害なし。

その日、虬江碼頭（きゅうこんまとう）に接岸上陸した。ここは日本軍の初の上陸作戦の

際、飯田部隊長が戦死されたところで、のち飯田棧橋と呼ばれていた。戦禍の跡が生々しいなかを任地月浦鎮（げつほちん）へ夜行軍となった。着後、地区の警備。

10月25日、江湾鎮（こうわんちん）攻撃の一翼を担い、附近の警備に任じていた。

11月13日、ウーソン港（こう）より乗船、揚子江を遡り、11月15日徐スロウチン口（こう）附近に上陸、重藤支隊に配属。キョウホ鎮（ちん）、梅李鎮（ばいりちん）、常熟城（じょうじゅくじょう）、王荘（おうそう）、チョウケイ橋（きょう）で後方警備についていた。夜間勤務中、分隊員石川勝三郎立哨中、下痢などの症状発生。翌朝、分隊長に報告。早速、軍医の診断を受けたところ、コレラ疑似症と認定され、即日入院と云うことになった。入院するところが未だ無いので暫く待ったところ、一里離れた梨荘鎮（りそうちん）に病院開設の連絡があり、分隊員一同、本人をリヤカーに乗せ、別に担架を準備し、送っていった。先発が着いたばかりで、軍医2名、衛生兵2名だったので、仮の病室にする一隅を片付け、休める場所を作り、やっと落ち着かせることができた。

隊員を集め戦場の常として『会うは別れの始め』である。君にして上げられることの最後になるかも知れない。我々の召集は両親の子育てのできばえを見て貰う機会、両親も真剣に見守り願いをかけておられる。そのお陰で今まであらゆる危機を乗り越えて来ている。病など負けないことも「孝の初め」だと頑張っって早く故郷に帰れるよう祈っている。今日、出る時に聞いた話では部隊は予定どおり光蔭（こういん）に向かう。小隊は隔離の件も出た。部隊と離れ無錫（むしゃく）に留まるようになるようだが、一小隊だけの分屯では見舞に来る余裕などないかも知れない。今度はお前の元気な姿を分隊で見ると楽しみに1名欠員の分隊を充分生かして行くから安心して治療に専念して帰ってくるんだよ」と別れたのが最後であった。

* * * * *

患者は治療のため、翌日、船で常熟野戦病院に移送され、再び会う機会がなかった。あまり連絡がないので内地還送にでもなったのかと思っていたところ、昭和13年1月8日夜の会報で、前年の12月10日、常熟で戦病死したことを知らされた。全員無事帰還の望を断たれ、ひとり淋しく死んで行ったことを思い、泣けた。出征以来一番気にしていた分隊員の死を遺族に知らせる手紙を遂に書く破目となった。部隊で第一号の死であった。

* * * * *

戦地に来て第一番に感じたことは戦火の通り過ぎた跡の姿である。戦争は軍人だけのものと思っていたが台風のように一切を巻き込んだ悲惨なもので、想像を絶する姿である。弾丸には目も心もないので見分けてくれない。

大陸は陸続きなので達者な者は何日でも歩けるが、日本では島なので追い詰められれば終わりである。絶対に負けられない心境で何時も励ましあってきた。

* * * * *

二度とあのむごい戦争をしてはならない。ひとりの尊い命を中国大陸で失ったことは今で

も悔まれてならない。古里に残した妻子のことが気がかりで死んだことだろう。ただ冥福を祈るだけである。

(はやし まさひろ 明治40年生まれ)